矢作川流域圏懇談会通信

R5 第４回公開講座

発　行　日：2024 年３月
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第４回公開講座を開催しました！

流域の山・川・里・海のつながりをテーマに、第４回公開講座を開催しました。豊田市産業文化センターでの会場およびオンラインによるハイブリッド方式で開催し、全国から多くの方にご参加いただきました。

- ◆ 日　時：2024 年２月 12 日　13:00～16:30
- ◆ 会　場：豊田市産業文化センター 多目的ホール
- ◆ テーマ：川がつなぐ 私たちの未来　～知らなかった山・川・里・海のつながり～
- ◆ 講　師：松沢孝晋 氏（日本トンボ学会）
  神田浩史 氏（NPO 泉京･垂井）
- ◆ 参加者：117 名（会場 43 名・オンライン 74 名）　＊事務局含む

◆公開講座の内容

1．基調講演

■基調講演Ⅰ　富山理論から「健全な流域圏」を考える　講師：松沢孝晋氏（日本トンボ学会）

【講演内容】

矢作川流域における山・水田・川・海の役割と課題を富山和子氏の著書をベースに検証し、健全で持続可能な流域圏の形成に向けて私たちができること、やらなければいけないことについて考察しました。

■基調講演Ⅱ　「流域単位の地域理解」をわかりやすく伝えていくために　講師：神田浩史氏（NPO 泉京･垂井）

【講演内容】

NGO など国外の活動で経験した流域単位での生業・環境の共通項、木材の流通と世界の森林減少などを整理しながら、国内における流域単位での持続的な資源の循環のあり方や、流域単位の地域理解を伝えていくための視点、揖斐川流域における活動内容について提示しました。

開会挨拶

基調講演Ⅰの様子

基調講演Ⅱの様子

2．ディスカッション

■ディスカッション　コーディネーター：神田浩史氏・洲崎燈子氏（豊田市矢作川研究所）

私たちが暮らす流域の問題点や課題に関して、基調講演に対する質疑、山・川・里・海のつながりに関する考え方について、参加者からの話題提供と車座形式によるディスカッションを行いました。

来場者による議論

車座形式のディスカッション

Youtube で公開講座のアーカイブ配信をしています

◆ディスカッションでの主な質問と回答　（• 質問　➢回答）

◆基調講演に関する質疑・意見等

- 基調講演から、流域とは単なる地形の単位ではなく、私たちがその中で活かされてきた空間であることを認識できた。今、流域の中のバランスが崩れ、様々な問題が起きていることを共有できたと思う。（洲崎）
- ダムに溜まる砂などには、色々な養分が含まれている。ダムの砂を海に持っていったら、アサリがよく育ったという話しを聞いたが、ダムの堆積物を下流に流すことは可能なのか。（会場参加者）
  - ➢ ダムは高度経済成長期に多く造られたが、当時は環境への配慮があまり考えていなかった。豊橋河川事務所では、置土実験などを行い、ダム下流に砂を流すことによる河川環境の改善効果等を検証している。（蔭山）
- 木造建築物が発表の中で出てきたが、ビルの木造化は現在どの程度進んでいるのか。（会場参加者）
  - ➢ 公共建築物だけでなく、一般建築物にも地域の木材を使っていこうという動きが出てきている。（洲崎）
  - ➢ 愛知県への取材では、高層ビルの事業所を木造化し、補助金も出ているという話を聞いた。（沖）
- 温帯の森林管理手法を熱帯に持ち込んで上手くいかなかった話しがあったが、詳しく教えてほしい。（Web 参加者）
  - ➢ 効率的な林業ということで、それまで択伐を行っていた熱帯地域で皆伐による伐採管理を導入してしまった。熱帯地域は雨季と乾季が激しく、雨季の豪雨で皆伐跡地の土壌が流失してしまった。（神田）
  - ➢ フィリピンは森林の樹木の多くが材として売れる一方で、インドネシアでは有用な樹木が林内にごく限られるため、伐採手法も異なる。国や地域によって木材生産や輸出の特性が異なることをよく理解する必要がある。（井上）
  - ➢ 熱帯ばかりでなく、じつは日本の森林では「緑の砂漠化」が進んでいる。そとから見て緑、しかし林内では最も大切な表土が流出する。（山本）
- 流域の土地利用を昔に戻せば、干潟や湿地は維持できるだろうか。土地利用の見直しの観点から、日本の自然保護の可能性や、難しさなどがあれば教えてほしい。（Web 参加者）
  - ➢ 土地のもつ特性に合わせた暮らしに切り替えていくことは大事と思う。流域の中での土地の特性や役割を考え、今の暮らしの中にどう活かしていけるかを考えていけば、流域の資源が持続していくと思う。（松沢）
- 瀬戸市に住んでいるが、宅地開発が進んでいる。雑木林もきれいになくなって、住宅地になった。富山和子氏の本を再読しているが、30 年前に読んだことが今も全然変わっていないことに憂鬱になる。（会場参加者）
- 揖斐川流域の話しで出てきた「穏豊」について少し説明してほしい。（洲崎）
  - ➢ ぎすぎすした競争から距離を置く、そうしてみると豊かな社会が見えてくるという考えが込められている。つながりを考えながら、流域単位の循環型社会を再構築するという意味を表現している。（神田）
  - ➢ 「穏豊」の穏やかに豊かになるという言葉に非常に感銘を受けた。（鈴木辰吉）
- アユ釣りをやっているので、トンボがいる川は季節を感じてうれしい。海や川の楽しみを山が支えていると言ってよいか？（Web 参加者）
  - ➢ トンボがいる川は楽しい。トンボは環境指標生物なので、川の環境変化に敏感に反応する。人の生活や経済の発展、土地利用の変化に翻弄されているのがトンボとか生物の世界だと思う。（松沢）

◆山・川・里・海のつながりについて

- 集落の暮らしが森林と切り離されて、適切な管理がされなくなってしまった。（山本）
- 水田のそばの人工林天然林が成長して日陰をつくり、水田の収量が急激に落ちている。陽の当たらない家屋は過疎化を「促進」させている。（山本）
  - ➢ 竹林が拡大してまともな米作りが出来なくなっている。農業だけではなく、森林の問題も考える必要があると感じている。（鈴木辰吉）
  - ➢ 人口減少や高齢化によって田んぼが荒廃してきている。そのため、都市の消費者の方に米を買っていただくことで山村の農地を持続させる自給家族という取組みを進めている。都市の消費者とつながる取組みを森林管理でもできないだろうか模索している。（鈴木辰吉）
  - ➢ 地域の魅力を再発見できないかということで、情報発信や野草やジビエに関するツアーを企画し、実施している。山間地の移住・定住につながればと思っている。（鈴木孝典）
- 根羽村の森林で山地酪農という取組みをしている。集落に近い場所で放牧することで、害獣などを寄せつけない干渉地帯としても機能している。厳しいことも多いが、山地で放牧する風景は地元の人にも喜んでもらえている。（幸山）
- 豊田市の足助地区で猟師をやっている。森林に食べ物がなる広葉樹が少なくなったことで、動物が人里に下りてきてしまい、獣害が多くなったと感じる。針葉樹林を広葉樹林に転換していけば共生ができるのではと思う。（清水）
- 山の問題は、林業だけで論じることはできないため「山の管理＝林業」ではないことを認識する必要がある。（近藤）
- 名古屋市や豊田市で学童保育の建物の木造化を進めている。全国に活動が広がればおもしろいと思う。（鈴木建一）
- 豊田には 25 の河川愛護団体がある。都市と川をどうやってつなげていくかが課題だと思っている。（近藤）
  - ➢ 水辺保護会というのが 25 団体あり、自分が住んでいる近くの川を中心に、清掃や河畔林整備等の活動をやっている。この活動を広げていけば、流域という面につながるのかと思う。（宮田）
  - ➢ 豊田市の地図に川を描くと、毛細血管のように川があることがわかる。みんなその中で生きていることに気づくことが必要と思う。（光岡）
- 伊勢・三河湾流域から流れ出た漂着ごみの３割くらいが鳥羽市の答志島に流れ着く。漂着ごみの問題、海の貧栄養の問題などみんなに知ってもらう活動を進めていきたい。（三ツ松）
  - ➢ 私たちの使った水が流れ着く海に関して、もっと関わって、つながっていかないといけないと思う。（洲崎）

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149　愛知県豊橋市中野町字平西 1-6　国土交通省豊橋河川事務所　事業対策官 蔭山、建設専門官　宮本、技官　松田

TEL 0532(48)8107

＊矢作川に関する情報は、国土交通省豊橋河川事務所流域治水課（cbr-toyo-chousa1@mlit.go.jp）までお送りください。